

きっかけは変身ヒロインになったこと  
～サイテーなアイツとのHがこんなに気持ちいいなんて～



adults only  
ノベル作品

●あらすじ● (この物語はフィクションです)

ひよんなことから変身ヒロインになったJKが敗北。  
敵に操られる同級生や、経験豊富な嫌いな男子にやられます。

●主な登場人物●

◆常識 守 (つねしき まもり)

正義感が強くて潔癖なJK。バージン。  
ふとしたことから変身ヒロイン「リリカルレッド」になる。

◆浮薄 軽佻 (ふはく けいちょう)

軟派な男子。非童貞で経験豊富。

◆ドーン

異世界の妖精。気弱なものの責任感が強い。  
ヴィランを捕まえる任務を負うが……。

◆ヴィラン

異世界の邪悪な妖精。秩序を乱して喜ぶ愉快犯。

●分量●

文庫本で約170P

## ●目次●

第一回「ドーンとヴィラン ことの始まり」	4
第二回「守と軽佻 学園での関係」	10
第三回「ヴィランとリリカルレッド 怒りの魔法 J K」	23
♀ 第四回「クラスメイトとリリカルレッド オナペット魔法 J K」	44
♀ 第五回「続、クラスメイトとリリカルレッド 手コキペット魔法 J K」	71
♀ 最終回「守と軽佻 爛れた新しい関係」	91
あとがき	174

\*頭に「♀」がある回はHシーンがある回です。

\*第五回、最終回は体験版・立ち読み版には未収録。

\*体験版・立ち読み版の「あとがき」はP 7 1からです。

\*リフロー版は環境によってページ数が異なります。

## 第一回「ドーンとヴィラン ことの始まり」

その日は夏の最初の頃で、やたらよく晴れていた。

とはいえ、一人の女子高生のセックス観が大きく変わること  
に、天気は無関係なのだが。

「おいコラ聞いてんのか！ この俺様を出しやがれ！」

昼休みのK学園。その校舎の側——連なる教室の窓のすぐ外  
に、威圧的で剣呑な怒声が響き渡る。だが、窓から溢れる生徒  
たちの喧噪は静まらなかつた。午前中の疲れを昼食やお喋りで  
癒やす貴重な時間だからと、無視しているわけではない。普通  
の人間には聞こえない声なのだ。

「おいドーン！ 今すぐ出さないと、あとでギタギタにしてや  
んぞ！」

やかましきの源泉は、鳥籠みたいなケージだった。鈍く黒光  
りする金属でできていて、格子のひとつひとつが太い。まるで  
牢屋のそれの中には、小さくドス黒いもやが浮いている。野球  
ボールほどの塊の中央には、豆粒大の一对の楕円がシミのよう  
についていた。夜の獣みたいに鋭く光っており、人外の声を発  
する度に不吉に明滅している。

「うう……大声を出さないでくださいよお……ヴィランさあん  
……怖いじゃないですかあ」

気弱な女の子の声が呻く。彼女は、ケージのてっぺんの取っ手を両手で慎重に掴んでいた。人間の手のひらで立ったり座ったりできる位に小さい小人で、緑色のゆったりしたワンピースを着ている。大人しそうな童顔といい、身体の起伏が乏しい体型といい、中学生の女の子といった外見だが、昆虫を思わせる背中 of 透明な羽でパタパタ飛び、自分よりも大きなケージを運ぶ姿は、おとぎ話のフェアリーのように。

「この檻は私たち妖精族の王様にして、美しく偉大な“妖精女王”様の特製品。私たちの【妖精界】から飛び出して、他の世界にご迷惑をかけちゃう凶悪犯罪者連行用の“ポータブルプリズン”。あなたのような悪い妖精を閉じ込めるだけでなく、この【人間界】の人間に聞こえる声が出せないほど力を封じ込める効果もありますが、私たちの“思念声”は、いつも通り同族にちゃんと届くんです。嫌がらせしないでくださいよお」

しっかり前を見て飛んでいる女の子妖精ドーンは、泣きそうな顔で哀願する。

凶悪犯罪妖精ことヴィランは鼻で笑った。

「まったく、こんなちんちくりんに捕まるなんてな。腹黒BB A製のこのアイテムがいけないんだ。射程内で使いさえすれば、使用者の格上であろうが捕まえられる」

「はい。こことは別の世界で皆さんにご迷惑をかけて喜んでいるヴィランさんの隙を、一生懸命突かせてもらいました」

「嫌な思い出を律儀に言うんじゃない、心が抉られて痛いだろうが!」

「ひっ……ごめんなさいです……」

「クソがっ。ちょっと怒鳴った位で小さくなる臆病者に捕まるなんざ、情けないにもほどがある……だが、俺様は諦めない。

【妖精界】に連れ戻される前に逃げてやる。お前の気弱さを突いてなあ」

「私の性格を突く? どういうことですか……?」

「思い切りわめいて怖がらせ、あるいはお前の集中を乱し、この牢屋を落とさせるんだよ。いくら頑張っても内部からは開かない。だが、外部から強い衝撃が加われば、この手の物は開くはずなのだ。そうだろう?」

「そ、そんなことにはなりませんっ」

おずおずと、だが決意のこもった目をする妖精。犯罪者をひたと見据えて断言する。

「私は確かに気弱です。強く出られると、すごく困ってしまう性格です。身体が震えちゃう弱虫です。でも私は“妖精女王”様の親衛隊のはしくれ。あの方にいただいたあなたの捕縛と連行というお仕事を、なにがなんでもやり遂げます! 妨害なんかには絶対負けません!」

犯罪妖精は忌々しげに呟く。

「キザなことを言う。しかし、態度は弱々しいが、妙に芯の強

い奴なんだよな。これまでずっと、一生懸命わめいてきた。こいつは確実に怯えるが、牢屋からは一度も手を離さない。力を緩めもしない。厄介なものだ」

「褒めてくださりありがとうございます。諦めて大人しくしててくださいね」

「馬鹿を言うな。俺様は諦めないぞ。お前も気づいているだろう。ここ【人間界】には、大好物である暗い感情が渦巻いている。欲望、嫉妬、焦燥、怒り、悲しみ……他のも含め、牢屋の中でもわかるほどの濃密さ。堪らねえぜ。外に出たら思い切り貪るぞ。人間どもに混沌を振りまき、暗い感情をさらに濃く多くする。考えただけでもゾクゾクするなあ。連れ戻されてこの楽しみを奪われるなんて、とんでもない」

「やめてくださいよお。生き物の思いやりや希望といった明るい感情を摂取し、力にできる私たち普通の妖精と違い、そんな特性と凶暴な性格のあなたも同胞なんです。他の世界にご迷惑をかけるなんて、“妖精女王”様でなくても耐えられません」

「嫌だね。俺様は必ず牢屋から出る。ここは【妖精界】に近いから、新しい追っ手が来るのに時間はかからないだろう。その前に適当に切り上げるが、ほどほどに大暴れしてやる」

「ダメです。そんな悪い考えは捨ててください！ 何度も言いますが、私は絶対にこの牢屋を離したりしません！ 考えるだけ無駄なんですから！」

勇気と使命感で強く言ったとき、急速に風切り音が近づいてきた。

「え? ……きゃん!」

トカーン。

どこからともなく飛んできたジュースの空き缶が、二回りは小さい妖精の身体にまともに衝突。数十センチも吹き飛ばされた。だが彼女は、なんとか踏ん張る。

「あ、いけない!」

身体全体がジンジン痛むが、そんなことよりもとんでもない失態に気づいたことで悲鳴を上げる。缶が当たった衝撃で、両手を離してしまっていたのだ。

「やったぞ!」

反対に歓喜する犯罪妖精。牢屋は吸い込まれるように草むらに落ちていく。地面に激突して転がる間に入り口が開いた。待望の瞬間を逃がすわけがない。彼はすぐに飛び出した。

「ワハハハハ! ナマで触れるとひとしおだぜ。檻の中で感じていたよりも遙かに濃厚な欲望が、ドス黒い情念が、広く強く渦巻いてる! 早速食らうぞ……おおっ、こりやうめえ! この世界のはなんてうめえんだ! しかも力が漲る、溢れる! 暴れまくって存分に楽しむ気力がもりもり湧いてくる!」

犯罪妖精の力は増大していた。夏の黒雲のようにどんどん大きくなっていく。檻の中では無理だったというのに、ソレの狂



喜の声は人間にも聞こえる大声となり、辺り一帯に響き渡る。何も知らない学生らが騒ぎ始めたときには、昼の学園は丸ごと彼に包まれて、闇に染まり済み。胸の透くほど照る太陽は邪悪な色で遮断され、不安を煽る紫色の塊にしか見えなくなっていた。

## 第二回「守と軽佻 学園での関係」

時間は十分ほど遡る。

「おいお前ら、一緒にこいつを見ようぜ」

学園の昼休み。浮薄軽佻は机を寄せ合う数人の男子に声をかける。お喋りしながら箸を進めていた彼らは、彼が見せびらかす物に目を輝かせた。

「ちょ、浮薄……それって!」

「大人気でどこの本屋でも完売の……」

「おれらと同じ年にして今をときめくグラビアアイドルっ」

「内洲刃出井代のセカンド写真集じゃねーか!」

鼻息を荒くする男子たち。全身で今すぐ見たいと叫んでいる。

「あはっ。童貞丸出しの反応じゃん。チョーうけるんですけど〜」

浮薄と一緒に現れた女子が屈託なく笑う。茶髪で全身がきれいに日焼け。大人びた顔つきなのに制服を着崩している。胸元はブラウスの裾を鳩尾で結んでビキニみたいに、スカートは丈を上げて短くし、パンティーのクロッチが見えそうな位の超ミニに変えていた。

なかなかのプロポーションな上に男を挑発しているとしか思えない姿の彼女は案の定、男子たちの目を楽しませた。写真集からいったん目を離し、今にも飛びかかりそうなすごい目つき

をしている。そんな彼らの様子に、女の優越感を満足させてもらったとばかりに婀娜っぽく微笑む彼女。横目で面白そうに見ていた浮薄と一緒に、空いている席の椅子を適当に掴み、机の島に横付けする。

「オレもそうだから、オープンスケベは好ましい。ほれ、タダで見せてやるよ。そのつもりで持ってきたんだ」

本と一緒に持っていたジュースのプルタブを上げ、グビリと一口やった後、本をそちらに放る。

「わお！」

男子たちの視線が落ちた本に集中。目の前にいても、自分の女でもない。だから、同級生ギャル子は触れることもできない存在。ならば、よりいい女をじっくり鑑賞しよう。そんな男心がこもった奇声を皆が上げる。彼らは弁当を脇にどけてスペースを作り、本を中央に配置。最初に手を伸ばした者が、レア物を拝める喜びに指を震えさせながら、ゆっくりページを繰っていく。日焼け女子が少しむすっとするが、目もくれなかった。

「すげえ！ なんてきわどい水着にポーズだ！」

「やっぱりスケベなカラダしてるぜ。抱きつけて～」

「おほ！ おっぱいデカ！ しかも綺麗！ スイカかよ！ 揉んだらどんな具合なんだろ」

ページをめくる度に大喜び。流石は思春期真っ盛り。真っ昼間の教室だというのに、分身は早くもガチガチに硬くなってい

る。節操なしのムスコをラクな位置にするため、彼らの手は度々机の下に潜り込んだ。

「気に入ったページがあれば、ケータイで撮っていいぞ。一枚三百円な」

「タダで見せてくれるなんて気前がいいと思ったが、ソレかよ」

男子たちは初めて文句を言うが、まず入手できない本のお宝ショット。性欲に目覚めて滾っている年頃の男子が、断れるわけもない。ひとり、またひとりとカネを払い、思い思いにパシヤリ。

「ネットに流したり、他の奴に売ったりすんなよ。著作権法を守れよな」

「ウケルー。あんたが言うなって感じだわ〜」

やっていることに反して真面目なことを言う浮薄の頭を、日焼け女子が笑いながら小突く。男子たちはドッと笑った。その後、ひとりが不思議そうに言う。

「しかしこの写真集。よく手に入ったな」

「オレの友達のママさんが、出版社の幹部でな。そのツテでゲットできたんだ」

「ス〇夫かよ。しかしお前、やたら人脈あるよな。そうやって、ちよくちよくレア物を持ってくる。カネにがめついチャラ男なのに。しかも、女にモテる。そういうのって、嫌われるタイプだぞ普通……いや、実際に嫌う奴はいるけど、そうじゃない奴

の方が多い」

「オレの人気の秘訣なんて決まってる。カリスマってやつ？」

「うわ、なんてムカツク笑顔だよ……でも、不思議と憎めないんだよなコイツって」

おどけて言う浮薄に、男子たちはまた笑う。

「カリスマがあるって便利だぞ。こういうこともできる」

おもむろにギャル子を見つめる。頭上にはてなマークを浮かべつつも、しっかり視線を絡ませる彼女に、

「おっばい揉んでいいか？」

怒られるとか、嫌われるとか、そんな怯んだ感情は全然ない。平気な顔で言う。

「うん、いいよー」

出し抜けにとんでもないことを求められたというのに、隣の日焼け女子は、意外に白い歯をこぼして見せた。さあどうぞと、背筋を反らして胸を突き出すことまでする。写真集のグラビアアイドルほどではないが、豊かで張りのある豊胸が、乳房が半分はみ出すハーフカップブラみたい着崩されているブラウスごと、ブルルンと粘っこく震えた。

「おおお! すげえ! なんてエロいポーズのおっばい……エロポパイだ!」

男子たちは写真集から目を離した。目の前でエッチな仕草をされると、そちらに引きつけられてしまう。揃ってクラスメイ

トに釘付けになる。小麦色のなめらかで瑞々しいふくらみに、熱く粘い視線を注ぐ。

「ふふん、どうよ」

本の中の女に男の興味を奪われた女子は、心地よさそうに微笑する。

「んじゃいくな」

二つ返事でオーケーされた浮薄は、缶ジュースに口をつけ、勢いよく半分飲み干す。小気味いい音を立てて机に置いたあと、おもむろに驚づかみ。それは手から結構はみ出る位のボリュームだった。着用者に反して皺のない硬いブラウスも綺麗に焼けた肌も一緒くたに手のひらに納める。

「うっし、準備完了っと……さあ、始めるか」

皆が凝視する柔肉のお宝に、遠慮のかけらもなく、まるで自分のオモチャで遊ぶみたいに、正面から何度も指を食い込ませる。大人のようにゴツゴツした十指を妖しく蠢かして、ムニムニグニグニとひしゃげさせた。

「ふふ、いつ揉んでもお前のおっぱいは具合がいい。ブラウスの硬くツルツルした感触と、その奥にある確かな弾力。ぬくもりのある柔らかいナマ乳のさわり心地。それぞれが、引き立てあってる。真っ昼間の教室で女子のおっぱいを揉むのは最高だぜ」

「ちょ、浮薄っ……あん、あんまりいやらしく揉まないでよお。

「ここは学園なのよ？ 本気を出すのはホテルでだけにしてよオ」  
一分もされていないというのに、女子の目尻は少しトロンと落ちていた。艶めかしい声が小さく響き、堪らなそうに上半身がくねる。周囲の男子のことなど、もう忘れていた。気持ちよく揉んでくれる彼と、揉まれる胸に意識が集中し、他のことはなにも見えない。

「すっげ、本気で感じてるぞこりゃ……チンポを揺すぶるエロい顔と声に変わってる」

「ちょっとされただけでこんななんて、どんだけ感じやすいんだよ」

「ちくしょう！ 軽佻はやっぱり男の敵だぜ。簡単におっぱいを揉ませてもらって……しかもホテルとか……そこでこいつを、こんなにエロく調教したのか……！」

「ガキの頃から近所の年上とかに誘惑されてやりまくってるという話だが……普通に考えれば与太話にしか聞こえないエピソードも、こういうのを見せられるとマジにしか思えん」

それなりに美人でナイスボディで日常的に顔を合わせているクラスメイトが、妙に憎めないもののどう考えても男の敵であるチャラ男に、大事な部分を明け渡している。しかも、色っぽく声を出している。そんな様子は、相当刺激的だった。男子たちは、写真集を見ているときよりも興奮している。一目でわかるほど目を血走らせて、我慢できないほど疼く股間を撫で回し

ている。

「おっぱいが好きなら、お前らも彼女作れよ。女のカラダはいいぞ〜」

女子から手を離し、説得力がありすぎることを言う。

「おっぱいもいいけど、それで女を選ぶのはなあ……やっぱり顔が可愛くなくちゃ」

「手が綺麗な子もいいな。それでおれの汚チンポを扱ってもらいてえ」

「柔らかくてすべすべの肌に擦りつけて、自分の汁をぶっかけて汚すのに憧れてる」

「けど、理想の彼女と付き合うなんて夢のまた夢。都合よく現実にはいたとしても、俺たちなんて、そこいらの女子も興味を持たない平凡系。ザ・ロープライス男子。そんなだから、こういう写真集はありがたい」

男子たちが大事そうに本の中のグラビアアイドルに目を向ける。そのときだった。

「ちょっと、あんたたち！ 神聖な教室で、なに馬鹿なこと言ってるの！」

凜々しい怒声が彼らを襲う。皆が一斉に振り向くと、うんうん頷く数人の女子を従えるように、ひとりの女子が仁王立ちしていた。

ほんの一メートルほどのところにいるのは、身長百五十ほど



の、平均より少し背の低い女の子。やや童顔の可愛らしい女子高生でもある。しかし、制服を几帳面に着込み、夏の太陽のように輝く瞳で叱りつける様子には、強い正義感と心の強さが滲み出ている。おまけに、他のクラスメイトよりもひととき豊かに実った胸元といい、均整のとれた豊満なスタイルといい、背丈が低いのに弱々しい印象はない。精神のように身体もだいぶ大人びている。

「げえ、面倒くさいのがきちまった」

「なによ、いいところだったのに……堅物ちゃんってば、今日も堅物なんだから」

写真集を見ながら騒いでいた男子と胸を揉まれていた女子が顔をしかめる。

「よお、常識守。ひょっとして、オレにおっぱいを揉まれにきてくれたのか？ 相変わらずいいおっぱいしてるよな。クラス……いや、学園一だ」

ただひとり、浮薄軽佻は馴れ馴れしく手を上げた。「あたしのおっぱいを揉んでるときに他の女の子のことを言わないでよー」などと口を尖らせる日焼け女子を完全に無視し、現れた制服おっぱいをニヤニヤしながら見回す。

「そんなわけないでしょ、このスケベ！」

見られる女子は目尻をつり上げた。両手で胸元をキツク抱く。大事な部分を下品な視線から守りながら叫ぶ。

「午後の授業の予習をしていたら、この子たちがあなたたちの奇行を教えてくれたの。だから注意しにきたに決まってるじゃない」

彼女の周囲の女子たちがまたもや頷く。

「チーム・アンチオレがリーダー格に告げ口して動かしたわけだ。相変わらず損な性格だよな。代理人をやらされてさ」

「なによその言い方。この子たちに失礼じゃない。わたしは感謝しているわ。あなたたちの暴走を止められるのだから」

周りの女子から聞かされた話から、首謀者と認めた彼をきつと睨む。

「今すぐその変な本をしまって、くだらない話をやめてくれない?」

「おいおい。この本は別に変じゃないぜ? 大昔から、普通に本屋で売られてるものだし、いい大人も買ってるもの。男を癒やしてくれるいいものだ。おまけに、誰にも迷惑をかけていない。以上を言い換えれば、無害で世間の人役に立つ優れ物ってわけ。変と思う方が変だろ……まあ、オレらがべしゃってた内容は、興味のない他人には騒音だったろうけどさ」

「減らず口を聞く気はないわ。早くしまいなさい。先生を呼ぶわよ」

「これからは静かに見るよ」

「ダメ。即座にしまいなさい」

「なら、教室の外で見るか」

「ダメ。そんな不健全有害図書、たとえ学園での閲覧が禁止されていなくても、この学園にあるというだけでわたしや皆が気持ち悪いの。焼却炉で焼き尽くしたい位。それを、クラスメイトのよしみで譲歩してあげてるのよ?」

浮薄は深く息を吐く。

「やれやれ。にべもない。平行線か。これだからバージンは困る。もっと男の欲望に理解を持ってくれよ」

「なっ!」

気色ばんでいた女子高生が、耳たぶまで赤くなった。

「どうして私が処女だとわかるのよ!」

声を荒らげる彼女。教室のそこかしこで、かみ殺した笑い声が起こる。

「やっぱりバージンか。エライ大人が吹聴する価値観に染まりきってる優等生みたいに、こういうことにマジで理解ないもんな」

「なによ、悪し様に言って! そもそも処女かどうかなんて、この話に関係ないでしょ!」

「あるさ。なんなら、オレで確かめてみるか?」

「どういう意味よ」

「オレと初体験を済ませてみないかってこと」

「な、ななな、なんですって!」

本気とも冗談ともつかない調子で言われ、堅物女子がわなわな震える。

「最高のロストバージンをプレゼントするよ。性に対する見方が変わる位のやつをさ」

日焼け女子が合いの手を入れる。

「それ、おもしろいんですけど～。確かにこの、JKのくせにオールドミスみたいな処女子ちゃんも、蕩けて丸くなると思うわ。浮薄ってば、ほんと上手いのよねー。おまけにおっきくて、よく出してくれてえ、やってて超たのしーしい」

「一体なにを言ってるの？ ……上手くて大きくてよく出す、ですって？」

わけがわからないという顔をする守とその側の女子たち。一方で、意味を理解した外野の女子の何人かがゴクリと唾を飲み、ひそひそ何か言い合う。

「よせよ。ここは学校で、皆見てるんだぜ？ 言い過ぎだって」

答めるものの、本人は満更でもない様子だった。ニヤつきながらジュースを一気にあおる。空き缶にすると、開いていた窓からポイ捨て。

「あ～！ あんた、なに窓から捨ててるのよ！」

「ん？ ……あ、いっけね」

指を指して叱られてもなんのことかわからないという顔をした当人だったが、ジュースを持っていた手をしばらく見つめ、

理解の色を見せる。

「わりい。この件は、全面的にオレが悪いわ。褒められて気分をよくして、自分の家でくつろいでるときみたいに、つい放り投げちまった」

「言い訳はいいから、さっさと拾ってきなさいよ。中身が空の飛び方だったから、万一人に当たってもケガはないと思うけど、誰かに当たっていたらちゃんと謝るのよ?」

「へいへい……お前ら、鑑賞会はこれで終わりな。見てないところで写真を撮られちゃ商売にならないし面白くないから、こいつは持ってくぜ」

広げていた本をひょいと抱える。

「ちくしょう、結局見られなくなった」

「放課後また見せてくれよな」

残念そうにする友人たち。そのときだった。

ブワッ!

窓の外で、不吉な闇が噴き上げた。周囲はすぐに包み込まれる。

「なによこれ……?」

威勢のよかった守も異常事態に目を見開く。夜と違い、人や物が昼と変わらずはっきり見えるが、遠くの方は不吉に暗い。黒い霧のドームで学園全部が覆われたみたいだった。あんなに綺麗に輝いていた太陽も今では闇に遮られ、紫色の不気味な塊

にしか見えない。

「オレがポイ捨てしたせいじゃないよな……」

浮薄が呻く。他のクラスメイトもそうだったが、この凶太い男子高生も怯えと不安を隠しきれない。全員がふらふらと窓に行き、外の様子を窺う。すると待っていたかのように、耳をつんざく野太い叫びがし、次いで哄笑が木霊した。

### 第三回「ヴィランとリリカルレッド 怒りの魔法JK」

「ガハハハ！ 俺様はヴィラン！ 異常事態に驚き戸惑っているな人間ども。貴様らから溢れる恐怖の感情がこの場を満たしているぞ。ううむ、まったくとしていて、それでいてコクがあって、なんとも美味だ。しかも、力が漲ってくるぞ」

教室の窓から外を見た守のクラスのみならず、同じように顔を出している他の全校生徒は絶句した。

グラウンドの真ん中に仁王立ちし、なにやらわめいているのは、見たことのない怪生物。背丈は二メートルほど。人間の形をとっているが肉体と呼べる物はなく、黒いガスの塊といった感じであった。輪郭はやけにギザギザしており、全身が明滅している。黒一色の存在ではあるが、人間の目に相当する部分は、どう猛に白く輝いている。校舎から顔を出している人間たちを恫喝しているとも、値踏みしているともつかない様子だった。

「なによアレ……ひょっとして、映画の撮影かなにか？」

守が呟く。闇に包まれた学園。妙なガス生物。とてもまともなことではない。しかし、目の前で起きており、また存在している。だとすれば、そうと考えるしかないではないか。聞きつけた誰かがほっと息をつく。

「だよなあ。いくらなんでもフツーじゃねえもん」

「映画の撮影だったら、事前に知らされてね？ きっと、ドッ

キリの類いだろ」

「とりあえず写真写真。それからネットにアップしてと……」

張り詰めていた空気が和らいだ。皆、リラックスした様子でケータイをかざす。シャッター音がやかましいほど木霊し始めた。他のクラスも同じ雰囲気になったらしい。生徒が談笑する声と共に、無数のシャッター音が鳴り響く。

「むう……なんて騒々しい。どういうつもりだ人間ども。やめろ。【妖精界】は緑溢れる世界。異端児の俺も自然派で、機械などは大嫌いなのだ。こちらに向けるんじゃない、鬱陶しい……!」

怪人が獣みたいに吠えた。全身から指の先ほどの小さい塊が分離する。数え切れないそれは生徒たちに向かった。彼らが逃げる暇もない猛スピードで突進し、途中で野球ボール大に膨れ、皆のケータイに衝突。するとどうだろう。なんとケータイは、粉のように細かくなりながら崩れ落ちた。

「ひっ、け、ケータイが……!」

「なんだこりゃ! いったい、何が起きたんだ?」

生徒たちの間に、再び緊迫した空気が満ちる。

「ガハハハ! 見たか。これが俺様の力だ。そら、コレを見てもっと驚け。恐怖しろ。上等な暗い感情を食わせてみろ!」

怪人は片手を上げた。ライフル銃で狙いをつけたみたいに、その先端を体育館に向ける。昼間は鍵をかけられていて誰もい



ないそこに、ケータイを破壊した小さい塊が放たれる。今度は野球ボール程度では済まなかった。猛スピードで飛んでいく最中、体育館を呑み込む球体に肥大して、着弾。鉄筋作りで台風もものともしない頑丈な施設も、先ほどのケータイのように儂く消えた。

「おい……嘘だろ……」

「マジかよ……こいつはドッキリじゃない……」

「映画みたいなことが、おれたちの目の前で起きてる……!」

今や、全員が異常事態を受け入れていた。怪人が現れたとき以上に驚き戸惑い、怯えた様子でざわついている生徒たちに向かって、怪人が無言で手を突き出す。

「お、おい……こっち向いてるぞ……なんだか、発射態勢って感じなんだが……」

「さっきはケータイに当たったけど……あの塊、人に当たったらどうなるんだ……?」

「そ、そりゃ……無機物だけに効果があって、人間の身体みたいな有機物には無害……」

「お前、証明してくれるのかよ。実際に当たって、ほら無事でしたってよお」

「冗談じゃない……なんでこんなことに……こんなところで死にたくない!」

生徒たちは一斉に駆けだした。我先にと廊下に飛び出る。他

のクラスの生徒も同様だった。逃げ出す全校生徒の振動で、悲鳴を上げるように校舎が揺れる。

「とんでもないことになったわね……」

守が厳しい表情で呟く。当たり前と言えば当たり前だが、遠ざかる足音からすると、皆はグラウンドとは反対の出入り口から逃げるらしい。合理的ではあるが、外は闇に包まれている。果たしてすんなり闇の外に出られるかどうか。

「わたしも逃げたいところだけど……腹立たしいわ」

強い目つきで外の怪人を見る。彼はその場を動いていなかった。腕組みをして、目元を山の形にしている。まるで嘲笑している風に。

「人間どもなんて言っていたし、超常的な力を使えるし、わたしたちなんか完全に見下しているのだわ。しかも、皆の大事なケータイを壊して、しかも、学園生活に不可欠な生徒集会が開かれる場所であり、皆で汗を流して切磋琢磨し親睦を深める体育館を跡形もなく消し去った。こんな理不尽、許されていいの？

いいえ、許せないわっ」

怪人をキッとにらみ付け、

「逃げる前に、一言二言文句を言ってやらなきゃ収まらない！

返答によっては、ぶん殴ってやるんだから！」

思い切り握り拳を突き出す。

「待ってなさい！」

肩を怒らせて教室を出ようと振り向いたとき、聞き慣れない声がした。

「身体から溢れる正義感のオーラが並外れて強いとは思いましたが、まさかアレを見せられてもヴィランさんに向かっていこうとするなんて……あなたならきっと!」

守はびっくりして立ち止まる。

「え、どこ? だれ? 誰か残っていたの? 危ないわよ、早く逃げないと……わ!」

無人の教室を見回していると、上からなにかが降ってきた。驚いて尻餅をつく彼女の目の前に、それがゆっくり近づいた。「す、すみませんでした。大丈夫ですか? 私、妖精のドーンといます」

「え……妖精?」

目をぱちくりさせる守。まじまじと見る。なるほど。あどけなさが抜けない女子中学生といった顔といい、ゆったりした緑色のワンピース姿といい、なにより、手のひらサイズで透明の羽を生やしている様子は、おとぎ話の妖精である。

「はい。こことは違う世界、【妖精界】の者なのです。犯罪者のヴィランさんを捕まえて自分の世界に戻る途中だったのですが、事故に遭ってしまい……」

「妖精に【妖精界】……信じられない話だけど、すでに目の前で非常識が起きてるわけだから、否定しても仕方ないわ。合わ

せるしかないか」

何度か頭を振って、告げられたことについて考える。

「ヴィランって、あの怪人のことよね……そう、あなたが逃がしてしまった悪い妖精なの……え、それじゃ、この騒動はあなたが原因ということじゃないの。なんて人騒がせな!」

「ひいい、ごめんなさいです……この近くを飛んでいたら、軽い金属の塊がいきなり降ってきて……それに当たった拍子に、閉じ込めていた檻を落としてしまって……ご迷惑をおかけして本当に申し訳ありません!」

守が眉をひそめる。

「この近くを飛んでいたら、軽い金属の塊が降ってきた、ですって? ……それってまさかジュースの空き缶………異変が起きたタイミングといい……もしかして、アイツのポイ捨てが発端なの? あの男は~!」

思い当たることに握り拳をぶるぶる震えさせる。妖精は怯えた様子でおずおず切り出す。

「あの、どうしましたか?」

「なんでもないわ。さっきは怒鳴ってごめんなさい。あなたは悪くない。いけないのは、人間の方よ。同じ人間として……クラスメイトでもあるし、事態の収拾に協力させてもらおうわ」

「はあ……よくわかりませんが、ご協力いただけるのは助かります」

「あのガス妖精、あなたが捕まえて檻に閉じ込めていたそうだけど、もう一度同じことをすれば解決よね。もしも手伝いが必要なら、わたしを使って。なんでもするわよ」

「すみません。捕まえるのも閉じ込めるのも、特別な檻がないとできないんです。私は探したのですが、見つかりませんでした。檻がキーアイテムであることは、ヴィランさんも知っていました。それを考えると、あの方がどこかに隠してしまったとしか……」

「ありそうな話だわ。わたしがあいつでも、そうするでしょう。だとしたら、まさか手詰まりなの……?」

「いいえ。方法はあります。あなたと私が力を合わせて、ヴィランさんを倒すのです」

「え!」

思いもしない言葉に目を剥く守。怪人の力は見ている。場合によってはぶん殴ってやる気でいたが、倒そうというつもりも、倒せるとも思っていなかった。なにせ自分は、ただの女子高生。こんな小さな妖精に加勢されたところで、予想が覆るとは思えない。だが、妖精は彼女に構わない。確信をもって説明を続けた。

「あなたの正義の心……明るい感情と私の力を融合させれば……そうして超人的な精神の力……魔力を帯びた姿に変身すれば、ヴィランさんにも負けないはずです」

「へ、変身ですって？ それに魔力って……それじゃ、わたしに変身ヒロイン……いえ、この場合は魔法少女？ になれというの？」

「それしか方法がありません。ヴィランさんが暴れていることは、いずれ私の仲間が察知してくれると思います。ですが、応援に駆けつけてくれるまで、この世界が荒らされてしまいます。誰かがなんとかしないと」

守は凜然と微笑んだ。

「いいわ。魔法少女なんてガラじゃないけど、あの理不尽の塊をとっちめてやれるのなら、やってやろうじゃない。自分の世界のことなんだもの。この世界の間人間が解決できるのなら、それに超したことはないわ」

「ありがとうございます！ それでは、わたしの力をあなたに送りますね。以後、わたしはあなたとひとつになり、戦いをサポートします。自然と歴戦の魔法少女のように戦えるよう、精神と肉体に干渉する具合です。副作用はありませんから安心してください。ただ、筋肉痛にはなるかもしれませんが」

「上等だわ。よろしくねドーン。わたしは常識守。マモリって呼んで」

「はい、マモリさん。それでは、変身を」

妖精はふわりと浮き上がった。守の正面、顔の高さまでくると両手を広げる。鉛筆みたいに細いそれを、守はそっと掴む。

互いに両手を握り合った瞬間、無人の教室が虹色の光で満たされた。

ピカァッ!

「あ!」

思わず大声を上げる守。悲鳴や苦痛の類いではない。妖精から放たれて自分を呑み込んだ光は、むしろ安らぎを覚える位。声を上げた原因は、自分の身体が変わっていくことだった。

夏の制服は身体のラインをはっきり見せる、タイトなワンピースに変化していく。すらりとした足やしなやかな両腕には、同じ色の長手袋と長靴下が装着された。どれも燃えるような紅色で、見た目はレザーのように照り光っている。一方、スカート部分は漆黒だった。丈はすこぶる短く、おまけに綿製のように薄く柔軟なプリーツタイプ。首元に現れたケープめいた短いマントとお揃いであり、どちらも、光と共に起こっているエネルギーの波動でパタパタはためいている。お陰で、長靴下からはみ出している生白い太ももの上半分どころか、ショーツまで見えそうになっている。

「ダメ、見えちゃう!」

気づいて慌てる守。女子高生の恥じらいで、必死に両手で股間を押さえる。そのとき、変身は終わった。

「危なかったあ……でも、考えてみれば教室には誰もいないのよね。慌てなくてもよかったかしら……本当に変身ヒロイン…

…格好を考えれば、話に聞いてイメージした通り魔法少女と呼んだ方がよさそうだけれど、なににしても、初変身をスカートを押さえて締めるだなんて、格好悪かったわね」

ぼやきつつ、スカートの裾に手を伸ばす。周囲に人がいないのを確認して、そっと上げた。

「わあ。下着も変身しちゃってる。明るい緑色だけれど、ハイレグ系の紐ショーツじゃないの。素材はコットンかしら。わたしは女子高生らしい純白パンツを穿いていたのに……でも、今の格好にはこっちの方がお似合いかも。デザインは大胆だけど、色は可愛いし」

次いで、先端以外の部分はかなり露出する胸元に目を落とす。「うう、ブラは消えてるのね……ショーツ以上に派手で恥ずかしい……しかも、おっぱいが少し小さくなってる……これって変身を解けば戻るんでしょうねえ……しっかり圧迫されていて、おまけに生地がすごく柔らかいから、動いたときに胸がズレたり痛くなったりする心配がなかったり、動きやすくなってるのはいいのだけれど……あ、髪の毛も変わってる。これって赤髪じゃないの。わたしったら、赤づくしだわ」

ぶつくさ言っていると、妖精の声が頭に響いた。物理的に聞こえてきたというのではなく、イメージが伝わってきたという感じだ。

『あの、変身姿は気に入りませんか？ 一応、マモリさんの深



層意識を参考に、お好みの姿を再現したつもりなのですが』  
「これってドーンの声……いえ、思念というべきかしら。ひとつになると言っていたから、話しかけるときはこんな具合になるのね……大丈夫よ、ドーン。普段しない格好になったから、驚いただけ。気に入らないわけじゃないの。むしろ素敵だわ。ありがとう」

『それならよかったです。身体の方はどうでしょう。具合は悪くありませんか?』

魔法JKとなった守ことマモリは、全身に意識を巡らせた。  
「悪いなんてとんでもない。身体がとても軽い感じ。へトへトに疲れた後、いやってほど食べて、何時間も爆睡した後でも、こんなに心地よくないわね。しかも、ものすごい気力の充実を感じるわ。こんな体験、生まれて初めて」

『変身が成功した証拠です。今、マモリさんの身体能力は飛躍的に向上していますし、魔力を使えるようにもなっています。どうすればいいかなんて、考える必要はありません。身体感覚のままに動けば、それで超人的な力も魔力も使えます。今あなたは、私とひとつになっていますが、それによって、歴戦の魔法少女のように戦えるようになっているのです』

「わかったわ……それじゃ、いくわよっ」

グラウンドに面したテラスの出入り口まで歩いて行って外に出た。ふわりとジャンプ。さびた鉄柵に降りると軽く蹴る。

ビュンッ!

反動で矢のように飛ぶマモリ。仁王立ちする犯罪妖精のすぐ側で危なげなく着地すると、彼を見据えた。

「こんにちは、犯罪妖精のヴィラン。わたしはマ……いえ、正義の魔法少女リリカルレッド!」

普通に名前を告げようとしたが、やはり今の自分に相応しい名乗りをした方がいいと思って、瞬時に浮かんだ名前を言う。

「むっ」

犯罪妖精がどう猛な視線を向けてくる。マモリは臆さず見得を切る。

「わたしたちの世界で……この学園で暴れるのは、このわたしが許さない! どうせ、言っても聞かないのでしょうか? だから、やっつけるわ。この手で【妖精界】に送り返してやるんだから。覚悟なさい!」

じっと見ていたヴィランは悟った風に言う。

「なるほど。ドーンのチビが力を貸しているのだな? ひとりじゃどうにもできないものだから、人間の助けを得たのか。馬鹿め。俺様を倒せるものか。ましてや捕まえるだと?」

まるで風穴が開いたみたいに、腹の部分が上下に開く。

「見るがいい。俺様を閉じ込めるためのアイテム、携帯式の牢屋はこの通り取り込んでいる。こいつを取り戻して再度ぶちこむには、俺様を倒すしかないというわけだが、そんなことは不

可能だ」

「なんですって?」

マモリの言葉に、ヴィランが嘲笑する。

「お前ら人間どもの暗い感情を取り込んで、俺様は大幅にパワーアップしているのだ。チビドーンの想像を絶する力を手に入れている。お前など、敵うものか」

「馬鹿にしないで! 学園生活に重要な体育館や、皆のケータイを壊した上に、人を見下すなんてほんと腹が立つわねあんたって」

力強く人差し指を突きつける。

「ドーンとひとつになっていると、力だけでなく彼女の気持ちも伝わってきてる。だから、彼女がどれだけあなたを捕まえる使命感に燃えているのか、他の世界に迷惑をかけてどんなに申し訳なく思っているのかもわかるの。私は、この世界のためだけじゃない。一生懸命な彼女のためにも、必ずあなたを倒してみせる!」

マモリは弾かれたように駆けだした。あっという間にヴィランに肉薄し、躊躇いなく拳を振るう。

ドガァッ!

見た目はもやの塊だが、触れ心地は肉のそれみたいな犯罪妖精は、二十メートル先の大木まで吹き飛んだ。

「ぬう……割と効いた……こいつ、思ったよりも強いのか?」

張り付かされた木から千鳥足で離れ、魔法JKを見る。しかし、その姿はかき消えていた。

「なにっ、どこへ行った!」

「ドーンの気持ち伝わってくるということは、あんたの情報も伝わってるってこと。一発で決まる相手じゃないのはわかってた。なら、いつまでも同じ場所にいるわけない。畳みかけるのが常道よ!」

思い切り殴りつけた直後、ヴィランの視界から消えるほどジャンプしていたマモリは、頭上から強襲。組んでハンマーみたいにした両手で、脳天を殴打する。

「ぐおっ」

「まだまだいくわよ! リリカルラッシュ!」

魔力を高めて青白いオーラを纏わせた両手の拳で、何度も何度も殴りかかる。

「体育館を壊した分、皆のケータイを台無しにした分、健気なドーンを困らせてる分、私を馬鹿にした分!」

目にもとまらない連打はことごとくヴィランに命中。防ぐこともできず、まるで木偶人形のように受けるがままだった彼は、強烈な締めを受けて五六メートル転がった。

「ぐうう……なんという戦いぶり。同じ人間でないとはいえ、相手を躊躇いなく袋だたきにする精神はどうだ。とても間に合わせの素人ではない。ドーンの子助は、力だけでなく戦闘能

力も与えているらしい。厄介だな」

よろよると立ち上がったとき、遠くから暢気な歓声が上がった。

「妙な物音がするから戻ってきたら、なんて燃える展開になっているんだ!」

「あの謎の怪人が、謎の魔法少女っぽい女の子にボコられてる!」

「映画顔負けのアクションで、すげえ迫力だったぞ」

「危ないから近づけないが、あの魔法少女。かなり可愛くないか?」

「確かに。胸はあんまり大きくないが、スタイルがいい。パンツが見えるんじゃないかって位にスカートをひらひらさせて戦う様子は、なんともそそられるぜ」

いつの間にか、何人かの男子生徒が集まっていた。危なくなったらいつでも逃げられるように油断せず、けれど物見遊山な雰囲気醸し出して、物陰から見物している。

「何考えてるのよ、あいつら! これは見世物じゃない。危険な戦いななのよ?」

変身したことで身体能力が向上しているマモリは、話し声にすぐ気づいた。視力もよくなっているので、男子が誰なのか一目でわかった。昼休みに写真集を見て喜んでいたクラスメイトだ。他にも何人かいるが、全員男子。しかも、顔見知りである。

「馬鹿男子とはいえクラスメイト。とぼっちりを受けさせたら可愛そうだわ……これ以上、戦いが激しくなって、周囲に被害が及ぶ前に、一気に決めてやる」

「くくく……一気に決めるだと？ 誰に向かって舐めた口きいてるんだ、ええコラァ！」

威勢とは裏腹に、酔っ払いみたいな足取りで近づいてくるヴァラン。

「言っておくが、俺様の力はまだまだこんなものじゃないぞ！」

「その有様で説得力ないわよ。今までの攻撃は、全部当たってるんだし」

「わざと受けて、お前の力をはかっていたのさ」

「はいはい。そういうことは、せめてヨロヨロするのをやめてからにしてよね」

「このメスガキっ」

「手加減はしない。全力を注入してぶっ飛ばしてあげる……リリカルインフェルノ！」

勝負がついたという確信混じりの勝ち気な笑顔と共に、集中して高めた魔力を解き放つ。突き出した手のひらから飛び出したオレンジ色の光の弾はみるみる巨大化し、二メートルの犯罪妖精を呑み込んだ。

「ぐお〜〜〜〜〜！」

もやの塊みたいな彼が消える。体内に取り込まれていた檻は、

乾いた音と共に地面に転がった。断末魔の残響が残る中、男子たちが沸く。



「ひゅ〜! 謎の魔法少女が勝った!」

「肉弾戦からのエネルギー波とは、往年のニチ〇サかよ」

「むひょ〜! 決め技の衝撃でスカートがめくられて見えたぞ!

結構エロい緑のパンツ!」

「大人の目を気にしなきゃならない健全アニメにはできない…  
…物理法則が支配するリアルならではのお色気サービスシーン  
だったな」

マモリが苦虫をかみつぶした顔になる。

「あの馬鹿男子ども、女の子を変な目で見て……ついでにとっ  
ちめてやろうかしら………あ、あれ……」

ドン。

急に足下がふらついて、マモリが尻餅をつく。

「どうしたのかしら……身体から力が抜けてく……全力を出し  
すぎたせい?」

息切れや動悸はないものの、手足にあまり力が入らない。ド  
ーンの声が頭に響く。

『すみません。マモリさん……いえ、リリカルレッドさんのや  
る気がものすごくて、力の放出を抑えきれませんでした。全力  
を出すのをお手伝いしたとはいえ、ここまで消耗させるつもり  
はなかったのですが……』

すまなそうに言う妖精に、マモリが優しく告げる。

「気にしないで。戦いは終わったのだから、これでも問題ない  
わ。それよりも、力を貸してくれてありがとう。お陰で、あいつ  
をやっつけられた。色々なもののカタキがとれた。感謝して  
るわよ……」



『リリカルレッドさん……』

「さあて、あの檻を拾わなくちゃ。わたしたちでやっつけたヴィランが逃げないうちに、閉じ込めないと」

そう言ったとき、正面のすぐ近くでヴィランの声がした。

「戦いは終わった？ わたしたちでやっつけた？ ハン！ おめでたい奴らだぜ」

「え！」

黒いもやがみるみる集まり、犯罪妖精の姿に固まっていく。

「そんな……！」

「残念だったな。お前の明るい感情は強かった。チビドーンの力もなかなかだった。実際、かなりのダメージを受けた。しかし俺様は、周囲の人間……この学園の数百人が放って渦巻いていた暗い感情を取り込んでいたのだ。力の量がダンチなんだよ！」

ヴィランの丸太のような足が、マモリを思い切り蹴り飛ばした。太ももの付け根から振りかぶった一撃は、まるで鈍器で殴られたみたいに強烈で、サッカーボールよろしく吹き飛んでしまう。

「あぐうっ！」

何度か地面にバウンドした魔法JKは、見物していた男子のところまで転がった。

「うう……いったあ……」

骨も軋む一撃だった。超人的な力を得ているはずだが、かなりのダメージ。数秒息ができなかった。せきこみながら立ち上がる。

「ゴホッゴホッ……はあ……はあ……まいったわね……」

動けるには動けるが、全力を出してフラついていたせいもあり、先ほどのように元気に戦うのは無理に思えた。

『た、大変です！ 絶体絶命じゃないですかっ……あわわ、どうすれば……私はともかく、リリカルレッド……いや、マモリさんを助けないとっ』

ドーンの声が、状況の悪さを強く感じさせた。側の男子たちの態度も絶望を煽る。

「うわ！ これってやばくないか？」

「さっさと逃げるぞ。あんな戦いに巻き込まれたら死亡確定だっ」

目の前で倒れている女の子をほっぽりだしてきびすを返す。

「お前ら待て！」

威圧感たっぷりに言ったのは、悠然と歩いてきたヴィランだった。

「そう怖がるな。こう見えて、俺様はお前らの味方なんだ。危害を加えるなんて野暮なことはしない。むしろ、いい目を見させてやる」

体育館や大勢のケータイを破壊したときみたいに、身体から

もやの塊が分離した。

「うおっ！」

「ひいっ！」

体育館やケータイと同じ目に遭う。そう直感した彼らは慌てて駆け出すが遅かった。小さいまま飛翔したもやの塊は、あっという間にそれぞれにぶつかり、体内に入る。すると、男子たちの動きが止まった。粉みじんになりながら身体が崩れ落ちる気配はない。

「いったい、なにが始まるというの？」

不安に満ちたマモリの声に応えるように、男子たちが振り返り、ゆっくり近づいてきた。

#### 第四回「クラスメイトとリリカルレッド オナペット魔法JK」

「へへへ。いいザマだな、魔法少女リリカルレッド」

「ヴィラン様に勝てるわけないだろ、この身の程知らず」

魔法少女リリカルレッドこと、常識守を取り囲むなり、男子たちが罵声を浴びせる。ニヤニヤと意地悪く笑う様子は、まるっきりイジメの加害者。相手を痛めつける快感に酔う若者のそれだった。

「え？ 皆、どうしたっていの？」

守は困惑した。それなりに見知っている男子たちだが、こんな様子は初めて見た。いやらしいことや下品なことを話題にするしょうがないクラスメイトではあるが、他人を威圧して喜ぶ性格ではないのだ。

それに、戦いの最中はどちらかというと自分に好意的だった。自分が負けるなり見捨てて逃げようとしていたのに、戻ってくるのもおかしい。彼らにとっては化け物である悪の妖精は、依然としてここにいるのに。

「明らかにおかしいわ……どういうことなの？」

ことの元凶であるヴィランが説明してきた。

「教えてやろう。俺様の身体から放出された小さい塊は分身だな。操り、対象にぶつけて、先ほどのように不快な金属の塊を灰にできる。しかし、相手が生き物なら、暗い感情と同化して

心の有り様を変えることもできるのだ」

「なんですって……!」

「お前らの言葉で言うなら、洗脳というところか。お前がチビドーンとひとつになっているのと同じように、俺様もこいつらとひとつになっている。そうして心を操って、俺様を主と認識させている。今のこいつらは、俺様の忠実なしもべ。そうだろお前ら!」

すると男子たちが万歳三唱。

「ヴィラン様万歳! 強い、格好いい、最高にクール!」

まるでコンサート会場みたいな熱狂ぶり。本当に心酔しているとしか思えない歓声に、周囲の空気がビリビリ震える。

「ちょっとあんたたち! 馬鹿なこと言っていないで正気に戻りなさい! よりによって、わたしたちに大迷惑をかけてるこいつに操られるなんて!」

一メートルも離れていない場所で囲まれ、しかもこちらに向かって叫んでいるので、やかましくて仕方がない。手で耳をふさいでも聞こえてくるほどなのだ。守ろうとしたクラスメイトが敵の手に落ちたショックもあって気持ちは萎えるが、一生懸命説得する。そんな隙だらけのところを、悪の妖精が突く。

「ガハハ、おらっ、ぶちゅうううう!」

背後に回り込むと、守の頬とあごを掴み、自分の唇と彼女のそれを勢いよく重ねた。

(どういうつもりなのコイツ! わたし、キスはまだなのにつ……こんな悪い奴に奪われるなんてっ)

ふりほどこうと顔を振り、両手を掴んで引きはがしにかかるが、戦いで消耗した身では無意味。抵抗などされていないように余裕綽々で、悪の妖精はキスを続ける。

(うっ……見た目はガスそのものなのに……さっきのバトルで触れたときもそうだったけど……まるで人間と同じ感触じゃないのっ)

「んんっ! んっっっ—————!」

悪人にキスされている汚辱感がこみ上げてくる。守は力尽くで乱暴されている女子高生のように呻き、ダメとはうすうす気づきながらも、顔を振り、あるいは身体をよじり、相手の手を引き離しにかかる。だが、やはり無駄だった。二メートルはある妖精は、百五十センチほどの魔法少女をがっちり抱きすくめ、完全に逃げられないようにした上で、絶望を誘うとどめに入る。

(ああ! し、舌が入ってきた……わたしの口の中に、コイツの舌がっ!)

こちらも人間の物としか思えなかった。温かくてぬめっている、弾力に富んだ筋肉の塊。しかも、味蕾のでこぼこすらあるそれが長く伸び、口内粘膜や舌や口蓋と柔らかく擦れながら、喉の奥へ進んでいく。さらには、舌がどんどん膨らんでいく。人間サイズだったというのに、舌の感触を失わず、太く硬く熱

くなる。守の口はめいっぱい広がり、口中は妖精の腐肉で内側から押されていた。

「んむむむっ! んむんむっ!」

こんな異様な状況に、耐えられるわけがない。涙目の彼女は、なりふり構わず髪を振り乱し、頭を振って逃れようとする。そのとき追い打ちが。

(ひいいいっ! な、なにか流し込み始めたわっ)

食べ物を呑み込んでいるときよりも数段強い流動感が、喉の中程に生まれた。ドクンドクンとポンプでくみ出している風な振動が食道を揺する。フランスパン大に膨張した舌も連動するように振幅し、口内全体が微弱に揺れる。

(うう……わたしはいつたい、なにをされているの? ……それにしても、こんなひどい目に遭ってるのに、身体は全然痛くないのはどうしてかしら……胸の奥が疼く変な気持ちにはなってるけれど)

胃カメラを呑んでいるときと似たような感覚に思えるが、苦しさはなかった。口や喉にはそれなりに膨満感があるものの、何かを流し込まれているはずのお腹には変化がない。それどころか、疲れているときにぬるいお風呂に入っている時みたいな、ゆったりした快感に襲われる。口をふさがれて息苦しいはずなのだが、それもなく、日常生活で意識しないで呼吸していると変わらない。

(なんなの……?)

身体が慣れてきて、痛苦がないとわかると、変な甘美の影響もあり、抵抗する気力が萎えてくる。代わりに冷静になり、状況により意識が向く。そんなときだった。

『まさかっ……こんなところまで来るだなんて……ヴィランさんっ、こないでくださいっ……いやです、きゃあっ!』

ひとつになって魔法少女に変身させてくれている妖精のただならぬ声が、頭の中に木霊した。

(ドーン? どうしたのドーン!)

呼びかけるが返事はない。代わりに、差し込まれていた舌が縮んで引っ込んでいく。ほどなく、ヴィランは離れた。守の唾液で濡れ、それで長く引いた糸を切りながら、自分の口を手の甲でぬぐい、言うてくる。

「チビドーンは、俺様が拘束した」

「なんですって?」

悪の妖精が白く光る目を三日月形にゆがめる。

「お前の中に直接、俺様の分身を置いてきた。そいつがあいつの相手をしている。変身して魔力を帯びていても、口移しをされては防げないのだ」

「それであんなことをっ……!」

「身体を痛めつけるのは趣味じゃない。人間は心に悲鳴を上げさせるに限るからだ。そのときの感情が俺様の大好物。よって、



痛みや苦しみは与えなかった。与えられた方がよかったか？」

「そういう意味じゃないわよ！ ……もしかして、わたしも操るつもりなのっ」

「まさか。もっと面白いことをしてもらおう。俺様に楯突いたお前が、倒そうとした俺様に最高に上手い暗い感情を食わせるのだ。つまり、餌になるわけだな」

悪の妖精の双眸が冷たく青白く輝く。すると、男子高生の黒い瞳が、同じ色に変わった。負けなくらいにギラギラと光を放つ。

「なにを考えているのよ……」

孤立無援。頼みのドーンすら、抜き差しならない状態に陥っているらしい。絶望的な状況なのを強く感じ、怯む気持ちが眩きに出てしまう。それを感じ取った風に、男子たちが笑う。嗜虐の感情を隠しもしないだけに、絶体絶命の身の不安を煽る。

「具体的な話に移ろう。魔法少女リリカルレッド。お前はこれから、この若い奴らの相手をしてもらう」

「相手をするですって？ 戦えとでも言うの？」

傲然と告げたヴィランに、少し弱くなったまなざしを向ける。彼は続けた。

「戦いと言えば戦いだが、詳しく言えばセックスだ」

「せ、セックス！」

「そうだ。既に話したように、こいつらと俺様は繋がっていて、

その記憶を共有している。こいつらは、半ば強制的な学園生活を窮屈に感じ、遊ぶカネが十分でないのに不満を覚え、他の男子が女を作ってセックスしまくりだというのに、そうなれないことに嫉妬や劣等感を抱いている」

「フツの男子高生って、そんなものよ……自業自得だけど」  
「お前がそのはけ口になるのだ。守ろうとした仲間の暗い感情……中でも特に強い鬱屈した性欲を満足させる生きた道具となり、倒そうとした俺様のいいなりになる哀れな肉人形となるわけだな。どうだ、惨めだろう」

「当たり前よ! 惨めすぎるわ……わたしはまだ未経験なのよ? セックスなんて興味ないけど、こんな形で汚れてしまうなんて最低じゃないの! 言うことなんて聞くもんですか!」

「当然の反応だな。そこでコレだ」  
と、ドーンの声が頭に響く。悲鳴と呻きが混ざっている、痛ましい叫び声だった。

『ひいいっ! ヴィランさんの分身が……私を雁字搦めにしている触手がっ……お、おぞましく動き始めて……うあっ……いやあああああ!』

まるでミュートにしたみたいに、彼女の声はそれきり途絶える。

「ど、ドーン! どうしたのドーン!」  
大声で叫ぶが返事はない。

「無駄だ。お前の中に分身を送り込んで間もなく、チビドーンは俺様の軍門に降った。あいつをどうしようと俺の意思一つ。正義の心を持つお前は、どうする?」

「あんたって、ほんと最低だわ……言うとおりにするから、ドーンに酷いことしないで」

「言葉だけじゃダメだ。土下座して頼め」

「くっ……」

齒がみする守。自分は全く悪くない。相手が全面的に悪く、しかも人質を取る卑劣さなのに、こっちが地面に額をつけるだなんて。状況への不安と怯えを塗りつぶすほどの怒りがこみ上げてくる。殴りかかりたい衝動に駆られるが、抵抗しても倒せやしないのは明白。報復にドーンを苦しめ、そうすることで自分の心を痛めつけるだけだろう。こちらが屈従の姿勢を示すまで。

(覚えてなさい……必ず逆転のチャンスを見つけて、吠えずらかかせてやるんだから)

怒りは反骨心に火をつけた。守は胸中で固く誓う。一方、そんな気持ちをおくびにも出さずに、その場に正座する。

「なんでも言うことを聞きます……いえ、おっしゃるようになりたいです……どうか、ドーンを苦しめないでください……この通りです」

命乞いする負け犬みたいに、従容と額を地面に擦りつける。

「ガハハハ！ いい格好だな。わかるぞ。態度はともかく、溢れる感情は隠せない。そんな風に大人しくしていても、心は憤怒で煮えくりかえっている。しかし、それがいい。その怒気が実に美味。俺様を倒そうとした魔法少女のものだけに格別だ！」

上機嫌で哄笑する悪の妖精。

「まったく惨めな有様だ。さっきまであんなに威勢よく戦ったのに、土下座だなんて。しかも、おれたちとセックスすることに承諾しただなんて。まさしく敗北ヒロインだぜ」

正面の男子が一步前が出る。

「けど、顔はかなり可愛い。体付きだって、小柄でおっぱいもケツも小ぶりで、発育が始まった中学生みたいだけど、メリハリがあってそそられる。見たところ、俺らと同じくらいの年みたいだが、そこもいいぜ」

へへへと下品な笑みを浮かべる。守よりも頭一つは背の高い中肉中背の彼は、とりたてて特徴のある容姿ではない。どこにでもいそうな男子高生。しかし、ただ一点。人一倍卑屈そうな顔をしているのが印象的だ。

(お昼休みに、浮薄と一緒に写真集を見ていたうちの一人だわ)

守が胸中で呟く。クラスメイトではあるが、学級の用事があったって二三回話したことがある程度の間柄だが、チャラ男の浮薄と一緒にいるのをちよくちよく見る。

「おい、俺を一番手にさせてくれないか？」

他の男子に許可を求める。他の男子が一斉にブーイング。

「なに勝手なこと言ってんだよ。この生意気で、けど性欲のはけ口としてはなかなかいい魔法少女とやりたいのは、お前だけじゃないんだぜ？」

「そうだそうだ! 何様のつもりだよ!」

普段は大人しいが、悪の妖精に支配されて感情の発露が激しくなっているらしい皆が殺気立つ。そこへ、落ち着いた声が割って入る。守の大嫌いな男子だった。

「落ち着けお前ら。こいつはきっと、この魔法少女に指一本触れずにいたそうとしてる。なら、先にやらせてもよくないか？」

(そういえば、こいつもいたのよね……暢気に最前列で戦いを見物して、逃げ出すときは真っ先に駆け出そうとしていたわ……起きてる事件の発端は十中八九コイツなのに)

そちらを見て姿を認めた守が顔をしかめる。浮薄軽佻だった。皆に写真集を見せて金儲けするだけでなく、白昼堂々、教室で女子の胸を揉みしだいて遊んでいた、軟派過ぎるクラスメイト。

「なんだって? どういう意味だよ浮薄」

彼の言葉に誰かが剣呑に訊ねる。問われたチャラ男はしたり顔で言う。

「そいつは女性恐怖症なんだ。同じ中学だったからわかるんだが、顔がキモイとか言われて、気の強い女子のグループによく詰られていた。はっきり言ってイジメなんだが、そいいつらは

教師に気に入られていて、ほぼ黙殺されていたんだ。それで、現実の女、特に同年代の奴は苦手になってる」

「そういや、日焼けのギャル子がお前におっぱいを揉まれてるときとか、興奮してなかったな。黙って写真集を見てたっけ」

「正確に言えば、生身の女が嫌いなわけじゃない。本やピンナップやビデオ……自分に何もしないのがわかりきってるのには、ちゃんと興奮できる。だよな？」

同意を求められた最初の男子が、ああと頷く。

「だから俺は、リリカルレッドをオナペットにする。お前らは、手で扱かせたり、肌にチンポを擦りつけたり、本番したりして楽しむ気なんだろう？ でも、俺はそんなことをしない。抵抗しないのはわかりきってるが、それでもなんか怖くて、気持ちよくなるどころじゃないからだ」

「だから代わりに、俺らに汚される前の綺麗なコイツをネタにしたい。こいつをオカズに、オナニーぶっこきたいって言うのか」

機嫌の悪さを隠しもしなかった男子たちが、同情の目つきになる。

「話を聞いて気の毒になってきた」

「オナペットにするだけで指一本触れないっていうのなら……」

「たったそれだけで満足を得ようというのが不憫じゃねえか」

「いいぜ。先を譲ってやるよ」

中には鼻をすする者までいる始末。ともあれ彼は、一番手として認められた。

「へへ、ありがとな皆……やいりりカルレッド。負け魔法少女」  
喜び勇んで守に言う。

「なにこの展開……」

黙って聞いていた守が渋い顔をする。

「いい話みたいな雰囲気だけど、しようとしていることは結局、一種の婦女暴行じゃないの。常識がおかしい女子の被害を受けたのは可愛そうだけど、それとこれとは話が別で、わたしは無関係でしょうが。あなたはただの加害者。今の自分を少しは恥じたらどうなのよっ」

「うるさい。この期に及んで反抗的な奴め。そんな態度をとっても、こっちには人質がいるんだ。結局、従うことになるというのに、無駄口を叩きやがる。でも、そんなお前をオナペットにできるなんて、どうしようもなく興奮するぜ」

「最っ低っ。操られているのはわかるけど、元からこんな欲望を秘めているから、こんな風なのに違くないわ。男って、ほんと品性下劣よね。女の子をなんだと思ってるのよ」

「やかましい。ごちゃごちゃ言わずに、正座になれ。偉人と対面するつもりで、背筋をピンと伸ばすんだ。わかっているな？

逆らうのなら、お前が守ろうとしているドーンとかいう妖精が、代わりにエライ目にあう」

「わかっているわよ……」

完全に悪漢と化している男子などに従いたくはないが、渋々言うことを聞く。彼のすぐ近くで正座となって姿勢を正す。

「くうっ! 女に言うことを聞かせる。なんて気持ちのいいことなんだ。しかも、決して手出しできない。最高だぜ。こいつは女。俺を馬鹿にして蔑んだ女と、性別上では仲間だ。しかも、偉大なヴィラン様を倒そうとするほど生意気ときてる。俺の積年の恨みを晴らすのに、こんなに最適な奴はいない。たっぷりオナペットにしてやる」

おもむろにベルトに手をかけて緩めた。自宅で着替えてるみたいに、ズボンも下着も乱暴に脱いで放り投げる。ワイシャツも脱ぎ捨てた。そうして、無地の白い半袖シャツと白いハイソックス、古びたスニーカーだけという出で立ちで仁王立ちする。

「俺のここを……チンポを見ろ。その気の強そうな可愛い顔をしっかり向けるんだ」

「きゃっ! 信じられない。他に人がいないとはいえ、ここは昼間の学園なのよ? 土だけのグラウンドでそんな格好になるなんて、変態だわ」

守は両手で顔を覆って正論をぶつける。

「見ろと言ってるんだ。妖精が苦しむぞっ」

男子がすごむ。痛いところを改めて突かれた守は、嫌な顔をしながら両手を遠ざけた。悔しげに身体の横で固定する。正面



——ほんの五十センチのところにあるソレに、おずおず目を向ける。嫌々しているのが一目でわかる、ぎこちない動作だった。

「うう……どうしてわたしがこんな目に……同級生の男子の股間なんて初めて見るわ……」

目を背けるのを許されない正義のヒロインは、クラスメイトの男の証をまじまじ見る。

「なによこれ……」

今までしたことがない位に顔をしかめる。運動をしていないのだろう。両足は適度に太いが肉が緩んで、男らしくなかった。太ももやスネに生える毛は色が薄く、本数が少ない。一応思春期ですからと、やる気なく生えているようで、かなり地肌が見えている。

しかし、股間は別物。山野の雑草地帯みたいに、黒々とした陰毛がしたい放題に生えている。ぼうぼうの茂みの真ん中から、ペニスがそそり立っている。

斜め四十五度位に反り返っていた。既に海綿体に血液が満ち、一人前に雄らしさを誇示している。血管を浮かせ、山肌みたいに凸凹しているそれは、真ん中に行くほど膨らんで、先端に行くほど細くなる楕円形。半分皮を被った亀頭はその位の細さで三角になっており、段差はほとんどなかった。

長さにしておよそ十五センチか。男が握っても亀頭とその下の少しが飛び出る位。太さは親指と人差し指で作った輪に入る

かはいらないかだが、一番太い真ん中辺りは確実に収まらそう。  
「これがペニスなの？ 本とかで見るサンプルとは全然違うじゃないの……」

かつて、頭にダのつく超有名な彫像を見たとき、人体の一部とは思えないほどグロテスクだと不謹慎にも思ってしまった。しかし、生まれて初めて見る同年代の実物は、遙かに毒々しい。生え放題の茂みに蓄えられた汗臭さや妙な生臭さが、鼻を殴りつけてくる。骨が入ったように硬くなりながら、ビクンビクンとへビみたいにのたくってる。見せられて気分のいいものではなく、得体の知れない不安や恐怖すらこみ上げてくる代物だった。

「へへ。嫌な顔してるな」

男子の勃起がますます漲る。姿勢のいい正座で股間を見る魔法少女の様子に、彼はかなり興奮していた。

「できるならもう見たくないという顔だ。けど、お前は逃げられない。正義の心……妖精を思いやる優しい心があるからな……うへへ……そんな魔法少女にチンポを見られるのは気持ちいい……それを確実に強要できる今の状態が快感だぜ……」

利き手なのだろう。右手を動かし、分身をしっかりと握る。

「過去に俺は、一方的にイジメられてた。だが今は、生意気な魔法少女にその恨みを晴らしてる……はあ……はあ……この勝利感はどうだよ」

機械仕掛けのシリンダーみたいに、思い切り自家発電を行う。「はあ、はあ、今までのオナニーなんか比べものにならない…くう、おおっ……ヴィラン様に楯突く身の程知らずだけど…俺をイジメたクソ女たちと違って、自分の身を省みずに仲間の妖精を助ける可愛い正義の魔法少女に……」

彼の目はすぐに焦点が合わなくなった。それでももうわごとのように眩く当人の手淫の速度は止まらない。むしろ増していく。「ものすごく嫌な顔を……ゴミでも見るような目をしてるけど……俺のチンポも、オナニーしてる様子もしっかり見てる……そんなコイツを見ながらチンポ扱くの、マジで気持ちよすぎる!」

男子の肉棒には、間断なく性感が湧いている。甘く妖しい快美は欲望を煽る。満足するどころか、もっと気持ちよくなりたいという感情を頭の中に広げて、それしか考えられなくしていた。

「あああっ、可愛くて強くて正義感の強いリリカルレッドが、嫌な顔してるけど、これ以上ないって位に嫌な顔をしてるけど!

俺のチンポを見てる! 俺が必死にセズリこいてるところを、見たくもないのにじっと見てくれてる!」

ペニスどころか下半身が痺れ、背筋にすら妖しい寒気が起こっている。そこまでの性感に身をゆだね、貪りながら、思うがままに喜びを口にし、至福の快樂発電に励む。

「やだ……なに一生懸命になってるのよ……」

悪の妖精と勇ましく戦っていた魔法少女も、すっかり気圧されていた。男子が醸し出す雰囲気は懸命さに溢れており、緊迫感に満ちている。間近にいるだけに、とても平静ではいられなかった。

「バカみたいにオチンチンを扱って……さっきまでとは様子が違う凶暴な目でわたしを見つめて……そうして快楽を貪ってる……これが男の自慰なの？」

眩きを聞きつけた男子が、切羽詰まった声で訊ねる。

「男のオナニーを見るのは初めてなのか？」

「当たり前でしょ？ わたし、恋人はいないし、まだバーजनなんだから」

「なんだって！」

男子が小鼻を広げた。牛や馬みたいに激しい鼻息を何度も行う。

「こんなに可愛いのに、彼氏がいない？ 処女？ 堪らないぜ。俺は今、無垢な魔法少女に男のチンポとオナニーを教えるんだ。男性経験なんてない清らかな正義の乙女に、俺は今、オナニーを見せつけてるんだっ！」

目で追えない位のものすごい早さで手淫をする。

「な、なによ……あまり変なこと言わないでよっ……見なきゃいけないのでも屈辱的だし、恥ずかしいし、なんだか怖いんだよ？」

それを強く意識させることを言われたら、余計に胸が苦しくなっちゃうじゃない」

「いいや、言うね。なぜなら、そうすることで俺も今の状況を強く意識できるからだ。チンポを抜く快感が跳ね上がる。もう、気持ちよく射精することしか頭にないんだ。やらずにいられるかっ」

先走り汗を漏らし、手淫の間にほとんど段差のない亀頭や竿の部分濡らしながら、何度も叫ぶ。

「俺は今、セックスとは無縁の清らかな魔法少女をオナペットにしてる！ バージンの正義のヒロインに男子高生チンポを見せながら、オナニーぶっこいてる！」

「言わないでって言ってるでしょ！」

最初に抱いた不安を忘れ、失礼すぎる態度に本気で怒る彼女を見下ろしながら、ラストスパートをかける。

「ハア、ハア、出すぞリリカルレッド！ 本当は顔とか身体にかけるたいが、それをしない代わりに最初にやらせてもらってるんだ……残念だが諦めて、俺はグラウンドにぶっかける。……けど！」

自分の斜め下、正座する守の膝の下辺りを狙って、肉棒をぐいと下げる。

「俺がかける場所は、リリカルレッドの顔だ！ もしくはオマンコだ！ 知らないだろうから教えるが、オマンコというのは

女性器の卑猥な呼び方だ!」

「なんですって! やめてよ! 卑劣な男子にそんなことを想像されて、しかも性欲処理に利用されるだなんて! 触れられたり汚されたりしなくても嫌すぎるわ! わたしに触れたり汚したりしなくても、十分気持ち悪いじゃないの!」

「ヒヒヒ! 本気で嫌がってるその顔! いい! 最高だ! そんな顔で抗議されると、もっと酷いことをしたくなる。おい、リリカルレッド」

血走った目で命令する。

「グラウンド顔に精液かけて、グラウンドオマンコにたっぷり中だししてと言え! 拒否はダメだ。したら、ドーンとかいう妖精を苦しめる。ヴィラン様に頼んでお前から引きはがして、そいつにぶっかけるのもいいかもな!」

「え!」

「そうだ、これは名案だ。同意するなら、俺の命令を断れ。お前が断ったから代わりに的にされてると教えながら、妖精をドロドロにしてやろう。そのときお前は、きっと今以上に嫌な顔をする。そいつをオカズにしたら、どんなに気持ちいいだろう!」

ウヒヒヒ!

「ダメよそんなの! わかったわ、言うとおりにする。だから、ドーンを巻き込まないで!」

守は深呼吸。自分の意思で脅迫に屈する事実には不快な汗をか

く。なにせ、自分で自分を貶める言葉であり、自分の尊厳を売り渡して相手を気持ちよくさせる行為なのだ。大人の言うことを聞いて誠実に生きてきた守にとっては、天地がひっくり返ったような衝撃であり、屈辱。言おうとしても無意識に言葉を呑み込んでしまい、なかなか言えない。

「ぐ、ぐら……ぐらう………はあ……はあ……ダメ……とても言えないわっ」

「どうしたリリカルレッド、さっさとしろ。ぐずぐずするな。俺はもう、射精しそうなんだぞ。我慢しろというのか？ ああ、わかった。そんな態度を取るのなら……ヴィラン様、お手数ですけど」

何を言おうとしているのか、考えなくてもわかった。それだけは絶対にダメ。守の中にある正義の心が私情を上回り、どうしても言えなかった言葉を飛び出させる。

「グラウンド顔に精液かけて、グラウンドオマンコにたっぷり中だして！」

「ヒヒヒ！ とうとう言った……色っぽさなんて全然ない、必死すぎる言い方だけど、良心の邪魔を振り切って一生懸命言いました感がハンパないっ。ああ、なんて甘美な響きなんだ。これで心置きなくフィニッシュを迎えられる」

男子はその場にしゃがみこむ。太ももを大きめに開いて片膝を着き、もう片方は膝を立てた。乾いた土のグラウンドに指で

絵を描く。握り拳大の二重丸の外側に、ちよんちよんと短い直線を等間隔に描く。合計六本。守は太陽のマークだと思った。だが、違う。二重丸を縦に貫く縦線を、最後に長く引いたのだ。そして、そのマークの上にかこう書いた。リリカルレッドのオマンコ、と。彼が描いたのは、いわゆるオマンコマーク。女性器を意味する落書きであった。

「ハア、ハア、出すぞ……リリカルレッドのオマンコに俺の精液を中出しするっ」

腰の位置を落とし、地面に触れそうな位までペニスの先端を近づける。だらだら溢れる先走り汁が垂れ、早くも小さい水たまりができているのは、マークのど真ん中だった。

「あ、あんた……普通そこまでする？ 度しがたい変態じゃないの……女性を辱める最低の行為だわっ」

叱りつけるが、男子の行動に畏怖を禁じ得ない。酷いことを色々されているが、今回は極めつけ。ここまでされると、怒りよりも恐怖を覚える。男子は暗く笑う。

「うへへ。その引きつった顔が堪らない。俺のオナニーをしっかりと見てくれてる証だと思うと、とんでもなく興奮する。オナニーなんて数え切れないほどやってきたが、今日のは最高記録。一生忘れられないだろう」

「おかしいわ、あんた」

「そんな常識的な言葉より、エロいことを言えよな。グラウン



ド顔に精液かけて、グラウンドオマンコにたっぷり中だしして、だ。覚えているだろ？ 俺がいいと言うまで、壊れた音楽プレイヤーみたいに繰り返せ。さもないと、お前が守ろうとしている妖精が、度しがたい変態の射精の的になる」

「うっ……ぐぬぬ……ぐ、グラウンド顔に精液かけて、グラウンドオマンコにたっぷり中だしして……グラウンド顔に精液かけて、グラウンドオマンコにたっぷり中だしして！」

逆らえない魔法少女は、下劣な欲望を露わにするクラスメイトの言うとおりにする。

「そうだいいぞ。ああ、可愛い声だ……嫌がってる気持ちが滲み出ている言い方だ……それに、心底嫌がってる顔……俺を蔑んでると同時に怯えている顔つき……こっちに意識を集中しているからこそする感情のこもった表情……！」

「グラウンド顔に精液かけて、グラウンドオマンコにたっぷり中だしして！」

涙目で卑猥なおねだりを言い続ける魔法少女を凝視しながら、一心不乱にペニスを扱く。分身はもう、はち切れんばかりに膨れあがっている。勃起ぶりはすさまじいが、快樂もこの上ない。肉棒どころか全身が蕩けているみたいな愉悅に包まれている。頭の中にあるのは、このまま射精することのみ。

「この状況、ものすごく優越感を覚える……俺をイジメていた女子みたいに生意気な変身ヒロインを……けどあいつらと違っ

て、可愛くて正義感が強くて優しいところもある魔法少女を、最低最悪のオナペットにしているこの実感……こんな快樂があるなんて知らなかったぜ……おおおお! ヴィラン様の敵のリリカルレッドのオマンコにナマ射精! 正義の魔法少女に心の汚い男子高生のエキスを直接注入!

「グラウンド顔に精液かけて、グラウンドオマンコにたっぷり中だしして!

本当に膣内射精しているみたいに叫ぶ。応えるような魔法少女の連呼を聞きながら、ぐつぐつに煮立った精液を解き放つ。

ビュビュビュビュウ! ドビュビュビュビュ! ビュグウウウウ!

「おおお! すげえ! 気持ちいい! マジで最高のオナニー射精だぞ!

「グラウンド顔に精液かけて、グラウンドオマンコにたっぷり中だしして!

尿道を押し広げながらドロドロの精液が迸る快樂感覚に、男子が吠える。膝をがくがく震えさせながらも背中を反らして股間を突き出し、魔法少女の仮装膣内に何度も何度も牡汁をかける。

「おらリリカルレッド! 敵に中出しされてオマンコ気持ちいいと言え! ついでに、変態男の射精を顔で受け止められて幸せとも言え!

「っ! そんなことまで言えというの……!」

男の射精風景を見るなど生まれて初めてであり、これまでの指一本触れない陵辱のショックもあった。命じられた言葉を機械的に繰り返しつつも、半ば呆然としていた魔法少女が呻く。もちろん言いたくないが、言わなければ健気な妖精が酷い目に遭う。自分が我慢することで彼女を守れるのならという意識が、清らかな口から媚びた卑語を飛び出させる。

「敵に中出しされてオマンコ気持ちいい! 変態男の射精を顔で受け止められて幸せ!」

またもや、色気など皆無のヤケクソ声で叫ぶ。

「うひょお! また気持ちよくなった! 扱いて出すのがマジで最高! こいつは至福のオナニーだ! リリカルレッドは最高すぎるオナペッドだな! こんないい思いをさせてくれるヴィラン様万歳!」

魔法少女の顔から目を離さず、猛烈な勢いで手淫。快楽を貪るためだけに若い精力を放出する。地面に描いたオマンコマークは、湯気を上げる生臭い白濁で覆い尽くされていた。もう、完全に見えない。正義のヒロインの仮想秘部は、変態的な情念の籠もった汁に溺れている。

(うう……こんなのいや……)

見るのを強制されている魔法少女は、半べそをかく。ここまで徹底的にやられると、怒りよりも汚辱感の方が強かった。

「ガハハハハ! 本当にいいツラしてるな」

他の男子たちと一緒にあって、黙ってニヤニヤ眺めていたヴィランが大笑する。

「憤怒、屈辱、不安、恐れ……なあ、リリカルレッド。お前の様々な暗い感情を感じるぞ。もちろん、食わせてもらっている。非常に美味だ。物理的に袋だたきにしたのでは、ここまで濃厚なモノは出なかったろう。若い男の変態情念で精神が追い詰められたからこそ、ここまで感情が熟成されているのだ」

やがて、猿のようにオナニーしていた男子が仰向けに倒れた。

「うひひ……気持ちいい……幸せえ……」

ドタン。

萎えない勃起からびゅるびゅると精液を噴きながら、白目を剥いている。

「あ、こいつの目……」

側にいた浮薄が気づく。

「ヴィラン様のしもべである証の青白い瞳が、普通の人間ののに戻ってる」

「心から満足したんだろう」

ヴィランが解説する。

「心を痛めつけて追い詰めるだけでは、そのうち感情の味が悪くなる。なにもかも諦めた人間の感情は実はマズい。ある程度の希望を与え、その状態で責め立て、あがかせるというのが、

美味しい暗い感情を引き出す秘訣でな。だから、希望を与えるんだ。男が満足すると、俺様の洗脳が解けるといふな」

「え？ ほ、ほんとうなの？ それじゃ……全員を満足させたら、皆が元に戻る……こんなことをする必要もなくなるのね……？」

「そうだ。ついでに言えば、全員を元に戻したとき、俺様は負けを認めよう。大人しく、この世界から去ろうじゃないか」

「っ!？」

萎えていた魔法少女の心に、少し気力が戻ってきた。なにせ、こんなことになるよう仕向けた悪の妖精に、一泡吹かせられそうなのだから。

「嘘じゃないでしょうね……」

「当たり前だ。長くとどまっていたは、チビドーンの仲間が勘づく。こいつの手に負えなかったとわかれば、今の俺様でも勝てるかどうかわからない強敵を派遣する可能性がある。捕まりたくない俺様は、新手が来る前にトンズラこいた方が利口というもの。そうだろ？」

「だったら、ドーンを解放してすぐになくなりなさいよ。それが一番安全よ」

「正論だな。けど、目の前にご馳走があるんだぜ？ 俺様は、美味しいものを食らうのが行動原理。ギリギリまで粘りたい。そういうわけだから……おいお前ら」

悪の妖精は振り向きもせず、男子たちに叫ぶ。

「さっさと二番手を決めておっぱじめろ! こいつの心を追い詰めて、俺様に美味しい感情をたらふく食わせるんだ。時間は限られてる。お前らだって楽しみたいだろ? だらだらせずにビシッとやれや!」

イエッサー!

男子たちは威勢よく返事する。魔法少女リリカルレッドを襲う陵辱の嵐は、まだまだ始まったばかりなのだ。

**\*体験版はここまでです。続きは製品版でお楽しみください。**

## あとがき

本作は2017年9月下旬～同年11月上旬に書いたものです。ラストシーンを書きたくて始めたもので、終わってみると予定の約三倍の量になっていました。

世間の常識の申し子みたいに実直な女の子がやり慣れた男にやられてスケベになっちゃうことや、Hに負けて有形無形の大事なものを失ったり自分から手放したりすること（本作では変身解除&正体暴露で表現）など、好きな要素を詰め込みました。

拙作の傾向はだいたいそんな具合です。

特に前者は基本方針ですね。嗜好にあうようでしたら、次回作や過去作もどうぞお試しくください。最近の商業作品にはこのようなものがあります。よろしければ。

「バブルガール！ デリヘルで目覚める娼婦の心」

作 わたし

挿絵 ミルクセーキ 先生

掲載誌 二次元ドリームマガジン 97号「娼婦特集号」  
(KTC社刊)

「女体化聖騎士セレス 甘美で危うい魔王暗殺計画」

作 わたし

挿絵 河野雅夫 先生

メディア 電子書籍専売品 (KTC社刊)

「ピンサロ女騎士 悪徳大臣様のご指名で～す！」

作 わたし

挿絵 冥土黄泉 先生

掲載誌 二次元ドリームマガジン 95号「丸呑み特集号」  
(KTC社刊)

拙作は他にもございます。

「木森山水道」で是非ご検索ください。



## 奥付

●制作● (2017年11月現在)

- ・小説 木森山水道 (別名義 きもりや)  
(サークル 夜山の休憩所)

ブログ <http://kimoriyamasuidou.blog115.fc2.com/>

<http://b.dlsite.net/RG11385/> (夜山の休憩所の Blog)

ツイッター <https://twitter.com/kimoriya2>

ノクターンノベルズ <http://syosetu.com/usernovel/list/>

ピクシブ <https://www.pixiv.net/novel/member.php>

- ・挿絵

「佐野俊英があなたの専用原画マンになります」(G. J?社)

公式サイト <http://www.teck.jp/gj/>

利用規約 <http://www.teck.co.jp/gj/products/sano/qa/qa.html>

「佐野俊英があなたの専用原画マンになります」のシリアル  
S/N:GJ0079908